

News Letter

■特集記事 1
「国際研究集会・
60年代演劇再考」

■特集記事 2
芸術文化環境研究コース：
シンポジウム
「地方の現場から演劇の未来を考える」

■特集記事 3
2008年度
第一回博士論文成果報告会

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■活動報告
●日本演劇研究コース P4
●映像研究コース P5
●東洋演劇研究コース P6
●舞踊研究コース P7
●芸術文化環境研究コース P8
●西洋演劇研究コース P8

■新刊紹介 P8

編集後記

特集記事 ① 報告

「国際研究集会・60年代演劇再考」

2008年10月17日(金)～19日(日)

小野記念講堂・井深大記念ホール・大隈講堂

「国際研究集会・60年代演劇再考」はグローバルCOEの本年最大のイベントであり、三日間にわたって総勢23名の登壇者を迎え、合計15時間にもおよぶ白熱した研究集会を展開した。来場者は合計約1,500名。関連企画として、デイヴィッド・グッドマン連続セミナー「アングラの行方——運動、救済、革命」(21日～23日)と、演劇博物館主催「アングラ演劇ポスター展」(15日～20日)も開催。こちらも聴講者・来場者に恵まれた。1960年代末から70年代にかけて隆盛を極めた小劇場演劇、通称「アングラ演劇」は、その影響力の大きさから神聖視すらされているものの、これまで大々的に教育研究機関で取り上げられることはなかった。本邦初となる本研究集会では、当事者からのオーラルヒストリーを得ることを主軸にしながら、そこへ後続の演劇人の発言や若手研究者の研究発表といった客観的なまなざしを加える席を組み合わせるプログラム構成をとり、神話化ではない具体的な検証を目指した。

初日はテーマを「問題提起」とし、研究発表「60年代をめぐる」から開始。考察の対象を演劇に絞らず、広く発表者を募り、三名のグローバルCOE研究員の方々から発表いただいた。佐藤洋氏「あとから生まれた人びとから——“60年代”の映画運動を歴史化するに当たって——」。大塚直氏「寺山修司の「市街劇」をめぐる——国際実験演劇祭「エクスペリメンタ3」を今日、再検討する——」。稲田奈緒美氏「ポップアートと



唐十郎氏

しての《バラ色ダンス》(1965)～土方巽の60年代“土俗”再考～」。刺激的な研究発表に、会場からは多くの質問や感想が出た。続いて、基調講演を二本行なった。まず大笹吉雄氏「アングラ演劇とは何だったのか?」では、歌謡曲をはじめとする当時の文化状況について説明いただいた後に、アングラという語の由来、当時のジャーナリズムの状況などについて適宜資料をご提示いただきながら、お話しいただいた。佐伯隆幸氏「アングラの『亡霊』」では、アングラ演劇に話を限定せず、迫力ある「佐伯節」で壮大な演劇論を論じていただいた。続くパネルディスカッション「現在から見た60年代演劇」では、松井憲太郎氏(GCOE客員講師)に司会を務めていただき、先述の「佐伯節」が象徴するアングラ演劇の言語感覚とは全く異なる言語を操って劇作を行っている三名の演劇人——宮沢章夫氏、平田オリザ氏、岡田利規氏をお招きし、議論いただいた。自作とアングラとの違いよりも、継承している部分や共通性について論じられた点が興味深かった。

二日目は「運動を語る」というテーマのもと、午前の部では



エレン・スチュワート氏



扇田昭彦氏(左)と蜷川幸雄氏(右)

扇田昭彦氏より、基調講演「60年代演劇の軌跡と影響」にて当時の演劇状況の全体像を説明いただき、アングラ演劇を考察する上でのポイントを整理いただいた。続いて、「アングラの真話・反神話」と題し、梅山いつきが代表して本研究集会の趣旨を述べた。本研究集会では海外からも二組のゲストをお招きした。まず、アメリカ・ニューヨークよりラ・ママ実験劇場の創立者であるエレン・スチュワート氏、当劇場併設のアーカイヴを運営しているオージー・ロドリゲス氏、開発担当スタッフ・藤薮香織氏をお招きし、シンポジウム「コーヒーハウス・クロニクルズ：ラ・ママ実験劇場の半世紀」を開催した。司会は本研究集会実行委員長・岡室美奈子が務め、招聘コーディネーター・二ノ宮祥子氏にも発言いただきながら、三者それぞれにラ・ママという拠点の特徴や社会に果たしてきた役割について語っていただいた。当日は、ラ・ママ創立47周年という記念すべき日であり、最後には本研究集会運営スタッフである学生たちよりスチュワート氏へ花束を贈呈。演劇運動の拠点を生み、今日まで維持し続けているスチュワート氏の精神性に触れることのできた二時間だった。ラ・ママとも関係が深く、60年代演劇と言えば欠かせない存在が寺山修司である。パネルディスカッション「黎明期の寺山修司～映像作品の観点から～」では、寺山の活動に精通されておられる、九條今日子氏、萩原朔美氏、安藤紘平氏によって、映像作品や海外公演を中心に寺山ワールドを論じていただいた。アメリカからはもうひとつ、日本近現代演劇研究者であるデイヴィッド・グッドマン氏をお招きした。60年代末に演劇センター68/71の活動に携わった氏は、アングラ演劇の運動を世界へ伝達したアングラ演劇研究の第一人者である。氏には連続セミナーの講師も務めていただいたが、18日は佐藤信氏との対談「運動としての演劇～演劇センター68/71をめぐる～」の聴き手を務めていただいた。佐藤氏の戯曲中に挿入されている歌をいくつか取り上げ、研究者、作者それぞれの立場から意見が交換された。佐藤氏からは、今後アングラ演劇を研究するに際し、戯曲をもっと積極的に分析することで、アングラ演劇の革新性を読み取ってほしいという意見が出された。

最終日はまず菅孝行氏に「60年代演劇の歴史的位置と現在」と題し、アングラ演劇について、新劇と同じく20世紀に起きた演劇運動として両者を比較しながら論じていただいた。「当事者からの発言」とテーマを立てた最終日は、続いて三つの対談を開催した。まず、蜷川幸雄氏と扇田昭彦氏の対談「演出家の役割」では、蜷川氏の演出活動を支える原動力について

てお話しいただいた。現代人劇場の頃からの盟友である劇作家清水邦夫氏に今一度筆をとらせたいとの思いから、人並み外れたペースで演出を手掛けていることや、現代人劇場と櫻社時代が氏にとっていかに忘れ難い活動時期であったかについて一語一語ことばを噛みしめながら語っていただいた。続いて、唐十郎氏と文芸評論家堀切直人氏の対談「唐十郎が語る紅(あか)テント」では、紅テント以前の街頭劇や野外劇をやっていた頃の話から始めていただき、後半は近年の唐氏の重要な作業のひとつとして、横浜国立大学で生まれた劇団唐ゼミ☆の主宰・中野敦之氏にも登壇いただき、唐氏の劇世界の魅力について論じていただいた。舞台と同様に非常に魅力的な唐氏の語りによって場内から笑いが起こる賑やかな対談となった。最終日の最後であり三日間の締めくくりに別役実氏と実行委員長・岡室の対談「『言葉への戦術』をめぐる」である。劇作家としての功績もさることながら、数々の演劇論、評論集を執筆されている別役氏であるが、なかでもタイトルにもなっている『言葉への戦術』はその代表作であり、1969年から71年の間に発表された数々の秀逸な演劇論がおさめられている。対談では本書を中心に、当時ベケットから受けた影響や、現在、方言へ関心を持たれていることなど、言葉を紡ぐ作業の裏側をお話しいただいた。

アングラ演劇は日本の演劇史上大きな転換点と見なされているが、当事者の方々の現在も衰えることのないエネルギーは単に個々の才能にだけ裏打ちされているのではない。演出や劇作で頂点を極めた現在であっても、他者に対しことばを届けようとする実直さこそ、多くの観客を魅了する豊かな作品を生み出す理由だろう。三日間お越しいただいたパネリストの発言にはこころを打たれるものが多々あった。今後はこの研究集会で得られた情報を広く共有すべく、報告集の作成や、現代演劇研究ネットワークの構築が、主催者であるグローバルCOEプログラムおよび、演劇博物館に課せられた課題であろう。最後に、素晴らしいゲストの皆様とご来場くださった皆様、ゲスト招聘にご尽力くださった扇田昭彦先生、佐伯隆幸先生、ご支援・ご協力くださった関係者の皆様に心より御礼申し上げます。半年に満たない準備期間ではあったが、労を惜しまず実現に向けて動いてくれた事務局スタッフをはじめとする実行委員と30名以上の学生スタッフにもこの場を借りて感謝したい。

(演劇博物館助手 グローバルCOE研究員

本研究集会副実行委員長 梅山いつき)

写真撮影：坂内太(事業推進担当者)



デイヴィッド・グッドマン氏(左)、佐藤信氏(右)



岡室美奈子(左)と別役実氏(右)

特集記事 ②

芸術文化環境研究コース：

シンポジウム「地方の現場から演劇の未来を考える」

2008年9月27日(土) 19:30~22:00 鳥取県鳥取市鹿野町「鳥の劇場」

第一回「鳥の演劇祭」実行委員会との共同企画として、演劇と社会の関係を考えるシンポジウムを開催した。「鳥の劇場」は、2006年より演出家中島諒氏が主宰する劇団であり、また同市鹿野町の廃校、旧鹿野小学校・旧鹿野幼稚園を劇団自らが創作と上演の拠点として改装し運営する劇場の名でもある。中島氏とともに、コース客員講師(発言順、敬称略)：小林真理(東京大学)、松井憲太郎(演劇評論家)、恵志美奈子(世田谷パブリックシアター)、伊藤裕夫(富山大学)、および演劇祭に関するアンケート調査を実施した五島朋子氏(鳥取大学、「鳥の演劇祭」実行委員)がパネリストを務め、野田邦宏氏(鳥取大学)の司会で進行したシンポジウムには、演劇祭観客をはじめ、遠方から駆けつけた文化政策研究者や学生を含む55名の参加があった。このプログラムは、演劇・劇場の公共性を検討する研究プロジェクトの一環であり、本年2月に早稲田大学内で実施された民間の演劇活動が担う公共性までを視野に入れたシンポジウム「公共劇場の10年」の続編である。高質な演劇作品創作を第一の使命としながら、地域との関わりを積極的に開拓する「鳥の劇場」の独自の活動は全国的に注目を集めている。地域に根を下ろして誕生した劇場が直面する課題に寄り添って議論を深めることで、とりわけ地方における演劇の存在意義を考える機会とした。

グローバル化の負の部分の負担がちな地方都市

が、地域独自の決定と行動を実現するためには、各地オリジナルなまちづくりが課題となり、質の高い芸術活動が内発的に進められることが重要である。なかでも、演劇・劇場には生身のエネルギーの発露と共有の場、思いや人情が交わる場として、現代社会で失われてしまったものの多くが凝縮されている。また、地方の地域拠点での活動には、集中して仕事ができる環境が入手でき、周囲との目的共有により芸術活動を通じて実際に地域の未来を変える行動主体になり得るなど、創造活動にとっても新しい可能性が開かれている。一般に認知されにくい演劇の価値が社会的理解を獲得するための努力と先行投資がもたらす創作者側に課せられている現状が明らかにされたパネルディスカッションでは、現行の芸術助成システムの問題点、評価の困難さと新しい試み、歴史研究から抽出される地域劇場運営のヒント、ワークショップの意義、大学をはじめとする地域諸機関との連携などについて、多方面にわたる活発な議論が繰り広げられた。



が、地域独自の決定と行動を実現するためには、各地オリジナルなまちづくりが課題となり、質の高い芸術活動が内発的に進められることが重要である。なかでも、演劇・劇場には生身のエネルギーの発露と共有の場、思いや人情が交わる場として、現代社会で失われてしまったものの多くが凝縮されている。また、地方の地域拠点での活動には、集中して仕事ができる環境が入手でき、周囲との目的共有により芸術活動を通じて実際に地域の未来を変える行動主体になり得るなど、創造活動にとっても新しい可能性が開かれている。一般に認知されにくい演劇の価値が社会的理解を獲得するための努力と先行投資がもたらす創作者側に課せられている現状が明らかにされたパネルディスカッションでは、現行の芸術助成システムの問題点、評価の困難さと新しい試み、歴史研究から抽出される地域劇場運営のヒント、ワークショップの意義、大学をはじめとする地域諸機関との連携などについて、多方面にわたる活発な議論が繰り広げられた。

(客員研究助手 長嶋由紀子)

特集記事 ③

2008年度 第一回 博士論文成果報告会

2008年7月19日(土) 13:00~17:00 大隈記念タワー(26号館)3階302会議室

今年度の第一回目となる博士論文成果報告会が開催された。今回の報告者は、李墨氏(グローバルCOE客員講師)、大塚直氏(グローバルCOE研究員)そして山梨牧子氏(グローバルCOE研究員)の三名である。各々の専攻分野は、日本演劇やドイツ演劇など多彩であるが、博士論文の提出までの経験談も交えて、明快に語っていただいたことにより、異なる分野の研究者にとっても示唆に富んだ発表となった。

司会：鈴木辰一(グローバルCOE客員研究助手)

- ① 13:00~14:10 李 墨氏(グローバルCOE客員講師)
提出先：早稲田大学 博士(文学)・課程博士(2008年3月公開審査済)
タイトル：歌舞伎「一谷嫩軍記」の研究
- ② 14:20~15:30 大塚 直氏(グローバルCOE研究員)
提出先：東京外国語大学 博士(学術)・論文博士(2008年2月取得)
タイトル：ポーター・シュトラウスの演劇-メディア時代の人間学
- ③ 15:40~16:50 山梨 牧子氏(グローバルCOE研究員)
提出先：イギリス・エディンバラ大学 PhD(2008年3月公開審査済)
タイトル：A Kaleidoscopic Portrait of *Takarazuka*
Modernity and Aesthetics in the All-female Japanese Theatre since 1914

日本演劇研究コース

活 動 報 告

■日独比較演劇研究会

「ヒロシマ被爆者の劇『傷だらけの手』を演出して」

2008年10月7日(火) 18:00~19:30

大隈記念タワー302会議室

講師:ペーター・クナート

(デッサウ劇場ドラマトゥルク兼演出家)

ドイツザクセン州ライプツィヒ近郊のデッサウに在住する文芸部員(注:ドイツの劇団や放送局において、脚本の選定、リライト、脚色および上演の宣伝を行う役職)であり、脚本家であるペーター・クナート氏に、氏が演出を手がけた日本の戯曲「傷だらけの手」(脚本、藤原健夫)を講演していただいた。この戯曲はクナート氏の演出でパウアーバッハの「シラー自然劇団」がドイツ語による上演を行い、2007年秋に日本で大成功を収めている。

今回の講演では多数の図像資料と、個々の場面や心理学的な状況に対する詳細な分析によって、戯曲作品を再び我々の眼前に展開させてくれた。とりわけ、この作品においてクナート氏が文芸部員、演出家として非常に困難な仕事を行ったことが聴衆には明らかであった。彼は衣装、背景、色彩、そして舞台環境に



対し、日本的なエキゾチックさをまとうせることはしなかったのだった。それは、このドキュメンタリー的な劇の核となるもの、すなわち戦火によって浮き彫りとなった人間の総体、そして憐憫の情を禁じえない被爆者の運命を、克明に表現するためであった。

(事業推進担当者 ギュンター・ツォーベル)

■留学生のための古典ゼミ

日本演劇研究コースでは、大学院博士課程の留学生を主たる対象として、現在は月2回の頻度で、毎回2時間から3時間程度の演習を行っている。なお、演習内容には以下の三本の柱がある。

第一に、『百人一首』の個人発表。これは、発表者が一首を選び、自身の興味・関心に基づいて自由に論ずるものである。第二に、古典(物語・説話・歌論書)の読解、及び、参加者による討論(これまでに扱ったテキストは、『源氏物語』『今昔物語』『無名抄』等)。第三に、近代文学の読解、及び、参加者による討論(夏目漱石、芥川龍之介、川端康成等の短編を精読)。

以上の三種が、このゼミにおける基本的な内容であるが、参加者が和歌・古典・近代文学それぞれの読解に慣れてくるに従って、討論も活発になり、日本の研究者が暗黙の了解事項として見過ごしがちな点にも、鋭い言及が成されるようになってきた。今後とも、日本文化の特質を国際的に捉える視点を保ちつつ、カリキュラムの更なる充実・向上を図っていきたい。

(客員講師 平林一成)

映像研究コース

活 動 報 告

映像研究コースでは事業推進担当者である小松弘が、2008年10月に開催されたイタリア・ボルデノーネ無声映画祭に参加した。本年の特集の中心になったのは、マリウス・プティパの弟子でもあったロシアのパレエ・ダンサー、アレクサンドル・シリャエフによって撮影された20世紀初めのロシア映画である。帝政ロシア映画がオフィシャルに誕生する以前に、このダンサーは映画を使って身体の動きや振り付けの記録、研究を行っていた。この映画祭に参加する多くの人々にとって、これは初めて知る発掘された歴史の奇跡であったようだ。我々はしかしながら、21世紀COEの最後の年にシリャエフに関する研究会を映像コースと舞踊コースの合同で行っている。これは演劇博物館が、映画研究の拠点として、世界の最先端の映画史研究に最も早くに着手している証でもある。ボルデノーネでは、本年になって復元されたばかりの数多くのシリャエフによる映画が上映されたほか、これまでほとんど知られていなかったアンナ・パヴロワの踊りを撮影したきわめて貴重なフィルム(1924年撮影)を見ることができた。無声映画と舞踊の関係については、さらなる研究が求められている。

今回の集まりでは、とりわけ我々が来年度に企画している<映画とジャポニズム>についての国際シンポジウムについて

話し合われた。ほぼ同様の研究会がベルギーでも企画されているため、GCOEではこのベルギーでの成果を参考にしたうえで、来年度の終わりあたりに国際シンポジウムを開催できればと思っている。またそれに合わせて、ジャポニズム関係のフィルムも収集したい。すでに昨年度2本のフィルムをフランスと共同で復元したが、本年度はさらに数本のフィルムの復元と購入を計画している。これらのプリントの復元作業は、日本の現像所で行われる予定である。復元される予定のフィルムの中に1本、日本を撮影したかなり古いフィルムが含まれている。今のところオリジナルの可燃性プリントの状態であるため、映像を詳細にチェックできないが、これなども復元してシンポジウムの際に上映できればよいと考えている。

また、昨年同様、フランスのアーカイヴと共同で、2本の初期フランス映画の復元作業をオランダの現像所で行う。1本目はマックス・ランデーの喜劇で、彼が舞台俳優になることを望むという話。もうひとつは、ステンシル・カラー極彩色のレオンス・ペレ作品である。いずれもこれまで失われてしまったと思われていた、非常に貴重な映画フィルムである。

(事業推進担当者 小松 弘)

東洋演劇研究コース

活 動 報 告

東洋演劇研究コースでは、今年度前後期計5回開催された共同ゼミと、7月に開催された前期定例研究会について報告する。

■共同ゼミ

2008年度より、古典部門と近現代部門共同で、研究員が博士論文の進捗状況と最新の研究成果を報告する共同ゼミが開始された(会場は何れも早稲田キャンパス 6号館 318室)。

第1回(2008年4月18日(金) 17:30~19:00)

事業推進担当者より共同ゼミ開催の趣旨説明があり、次回以降の発表者が決定された。

第2回(2008年5月31日(土) 14:00~17:00)

発表者: 伴俊典(演劇博物館助手・GCOE研究員)

「明代万曆期出版の選集に収録される故事の状況および演劇作品との関係」

発表者: 森平崇文(GCOE客員研究助手)

「独脚戯から見た上海—王无能とその作品を中心に」

第3回(2008年6月28日(土) 14:00~16:00)

発表者: 原田信(GCOE研究員・早大院)

「図像に見える八仙の変化について」

発表者: 大江千晶(GCOE研究員・一橋大院)

「日本統治期大連の早期新劇活動」

第4回(2008年10月4日(土) 14:00~16:00)

発表者: 李宛儒(GCOE研究員・名古屋大院)

「皇民化運動期における台湾職業演劇の改造

—《禁鼓楽》から《台湾演劇協会》の発足まで」

発表者: 辻周吾(GCOE研究員・京都外大院)

「中国現代話劇における言語表現についての研究—中国話劇におけるモノローグの特徴をめぐって」

第5回(2008年11月8日(土) 14:00~16:00)

発表者: 波多野真矢(GCOE研究員・中大院)

「魯迅、胡適の京劇観」

発表者: 赤木夏子
(GCOE研究員・東大院)

「1950年代の京劇改革について」



■2008年度前期定例研究会

2008年7月26日(土) 14:00~17:20

発表者: 清水拓野(GCOE研究協力者)

「観光資源としての俳優教育の魅力とその可能性—陝西省西安市の二つの事例から」

コメンテーター: 田村容子(福井大学専任講師・GCOE研究協力者)

発表者: 邵迎建(徳島大学教授)

「日中戦争期上海の話劇—『文天祥』をめぐって」

コメンテーター: 森平崇文(GCOE客員研究助手)

「秦腔」は陝西省を中心とする、中国西北部の代表的地方劇である。清水発表では、劇団の統廃合や観客離れが進む秦腔の現状打開策として模索中の、観光業界との提携の可能性とその問題点に関し、陝西省芸術学校と西安宏秦秦腔芸術団の二つの俳優養成機関におけるフィールド・ワークを基に発表された。

日中戦争期(1937~45年)上海の話劇は中国話劇史の中でも特筆すべき繁栄を迎えていた。ただ当時の上海が日本統制下にあったため、現在もその評価は低く、研究はあまり進んでいない。邵発表では、この時期の上海の話劇に関し精力的に発表され続けている研究成果の中から最新のものとして、1943年初演の話劇『文天祥』の上演史に関し発表された。

(客員研究助手 森平崇文)

舞踊研究コース

活 動 報 告

平成20年度の古典舞踊研究プロジェクトの企画として「最古の歌舞伎舞踊 志賀山流に伝承されている歌舞伎の型とその美学」と題する研究会を開催した(2008年10月10日(金) 16:30~18:30、早稲田大学国際会議場3階第1会議室)。ゲスト講師には志賀山葵師と門弟の志賀山千尋さんをお招きした。志賀山葵師は、83歳で、15代志賀山勢以家元と共に16年間志賀山流の伝承、保存、研究につとめてこられた。研究会の概要は下記の通りである。

1. 姫島の盆踊りとその足の基本動作のボンアシ・映像映写(吉川周平)

2. 歌舞伎舞踊の足の基本動作のオスベリのレッスン(志賀山葵 志賀山千尋)

3. 歌舞伎舞踊の三つの重要な基本動作:
首を三つに振ること、オスベリ、足拍子(志賀山葵 志賀山千尋)

4. 志賀山流に伝わる歌舞伎舞踊の古い要素の面白さ(志賀山葵)

5. 解説と実演:『馬場先踊』『京の四季』『綱は上意』(志賀山葵 志賀山千尋)

芸術舞踊である歌舞伎舞踊と、その基盤をなす民俗舞踊の盆踊りは、踊りの代表的なものだが、ゲスト講師による講演・実演と体験ワークショップを通して、前者のオスベリと後者のボンアシ(盆踊りの足)といわれる、足の動作の基本技法の関連と、志賀山流に伝承されている、簡潔で洒落た古いスタイルの面白さを理解することができた。質疑応答も活発に行われ盛会裏に終了した。

(客員講師 吉川周平)



■『東京／オリンピック』プロジェクト、PSI (Performance Studies International)

第14回研究大会におけるパネル発表

日時：2008年8月20～24日

場所：コペンハーゲン大学（デンマーク）

芸術文化環境研究コースでは、2007年度に実施した『東京／オリンピック』プロジェクトの総括として、2008年8月20～24日にコペンハーゲン大学を会場として開催されたPSI (Performance Studies International) の第14回研究大会にてパネル発表をおこなった。このプロジェクトは、理論的なワークショップの開催を通じて、舞台作品（とりわけドキュメンタリー演劇的な手法を用いた作品）の創造プロセスに含まれる、ドラマトゥルク的な意味での「研究」を媒介項として、理論的知と実践的知の協働可能性を探るものであった。

今回のパネル発表は、2007年11・12月に上演された『東京／オリンピック』に感銘を受けたメルボルン大学のピーター・エカソル氏からの呼びかけによるもので、パネルにはエカソル氏のほか、ポルトB演出家の高山明氏、ポルトBのドラマトゥルクであり、本学文学研究科博士課程在籍中でGCOE研究員でもある林立騎氏、および藤井慎太郎が参加し、各人が異なる立場から、現代演劇における実践と研究の変化する関係を多角的に論じた（偶然ではあるが、エカソル氏とはその1か月後、9月20～23日にイタリアはレッチェにあるサレント大学で開催されたEAJS（ヨーロッパ日本研究協会）の第12回研究大会で、GCOE研究員のカティア・チェントンツェ氏が企画し、GCOE客員講師の石井達朗氏と藤井が参加したパネルでも再会し、今後も研究上の協力を進めることを誓い合った。なお、この大会には本学関係者がほかにも数多く参加して盛会であったことを申し添えておく）。聴衆と活発な質疑応答を交わし、また、主に英語圏における演劇研究の現在の動向を知り、各地から参加した研究者、実践者との交流を深めることができ、今後の活動に向けての大きな糧となった。

（事業推進担当者 藤井慎太郎）

■研究会「演劇と日本近代」（演劇環境部会）

第1回 2008年6月20日（金）18：00～20：00

「近代日本における『劇場（制度）』の未成立をめぐる文化政策からのアプローチ」

提案者：伊藤裕夫（富山大学教授、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE芸術文化環境研究コース客員講師）

第2回 2008年7月25日（金）18：00～20：00

「末松謙澄らの“演劇改良”と“芸術の制度化”の失敗」

報告者：鈴木滉二郎（静岡文化芸術大学教授）

第3回 2008年9月19日（金）18：00～20：00

「地方劇場の「近代化」と衰退」

報告者：徳永高志（NPO法人クオリティアンドコミュニケーションオブアーツ代表）

いずれも進行は伊藤裕夫、会場は各回とも早稲田キャンパス6号館3階318教室（レクチャールーム）



月例研究会シリーズ「演劇と日本近代」は、演劇創造部会（演劇人の仕事の軌跡）、演劇環境部会の二系統で構成され、ふたつの異なる視角から近代日本における演劇と社会の関係性を立体的に描くことを目的としている。このうち、「演劇環境部会」は、演劇をめぐる制度面からの日本近代演劇史の分析により、演劇と社会の関係性を描く試みである。近世日本の豊かな演劇文化の歴史の存在にもかかわらず、なぜ明治以降、演劇に関する制度・文化が変容していったのかという問題を、文化政策（国や自治体といった「公的」機関の施策だけでなく、民間の興行資本や一般企業の動向、演劇人の意識、また観客サイドの動向も視野において）の多様な側面から検討する。各回で定めたテーマについて、問題提起者による基調報告に続き参加者が議論を行う形で進行している。

研究会の全体構想を討議した第1回に続いて開催された第2回では、静岡文化芸術大学教授鈴木滉二郎氏が、文化形成主体、国家体制、芸術概念、文化施設に関する各論点から芸術文化にかかわる明治政府の構造を分析し、現代の問題につながる源流を指摘された。

『芝居小屋の二十世紀』（雄山閣出版）の著者である徳永高志氏を基調報告者に迎えた第3回では、日本近代の政治・経済・社会の歴史と結び付いてきた芝居小屋の歴史のなかでも、とくに「劇場」が急増した19世紀末から1930年の状況について、近代日本の地域劇場の盛衰や運営実態、演目などから具体的に明らかにされ、劇場史の見取り図が提示された。

本研究会は、「演劇創造部会」との連携も深めながら、現代までを射程に入れた演劇環境をめぐる諸テーマを取りあげることにより、今後も参加者からのより活発な議論を引き出していく。

（客員講師 伊藤裕夫）

西洋演劇研究コース

活 動 報 告

■ 演劇論講座

日時：2008年7月25日（金）15:00～17:00

演題：『タデウシュ・カントール その人生の諸相』

場所：大隈記念タワー（26号館）302会議室

講師：ウタ・ショルレンマー氏（Dr. Uta Schorlemmer）

ポーランド演劇界の鬼才といわれるカントールの人と業績について、カントール研究者のショルレンマー氏に、その全体像を解説していただいた。ドイツ語での講演には、萩原健氏（GCOE研究協力者・明治大学講師）による逐次通訳が付き、また貴重な舞台映像も上映された。

日時：2008年10月24日（金）18:30～21:00

演題：『「演出演劇」としてのオペラ～学術的な考察の可能性～』

場所：早稲田キャンパス 6号館 318教室（レクチャールーム）

講師：長木誠司氏 東京大学大学院総合文化研究科・准教授
（超域文化科学・表象文化論）

演出家が既存のテキストを今日的視点で自由に解釈し、新たな作品として提示する、演出家主導の舞台づくり＝「演出演劇（レジーテアター）」は、近年の演劇学のキーワードとなっている。ストレートプレイに続いて、最近オペラの分野でも、これまで支配的であった原作の「忠実な」再現という手法に代わるものとして注目される「演出演劇」について、音楽学研究者の立場よりお話いただいた。

■ ベケット・ゼミ

岡室とベケット・ゼミのメンバーが、演出家、俳優とワークショップ形式でベケットの後期戯曲『ロッカバイ』の翻訳と上演台本作成を行なった。『ロッカバイ』は10月25日、26日に神楽坂のセッションハウスで上演された。また、上演後、外部の翻訳者や劇作家と討議を行なった。（事業推進担当者 岡室美奈子）

■ 17世紀フランス演劇研究会

今期は、17世紀の女性音楽家であるジャケ・ド・ラ・ゲールを取り上げた講演会と、その作品を演奏するコンサートを実施した。

日時：2008年7月26日（土）15:00～18:00

演題：『女性音楽家ジャケ・ド・ラ・ゲール
その音楽と生涯が示すもの』

場所：早稲田大学戸山キャンパス 34号館第3会議室

講師：小林緑氏 国立音楽大学名誉教授

フランス宮廷文化における女性音楽家ジャケ＝ド・ラ・ゲールの傑出した業績やその後の受容史をお話いただき、現行の音楽史を理解する際の偏りとは、どのようなものであるかを考察した。

日時：2008年9月26日（金）14:00～21:00

演題：『創造の喜び－17世紀フランス・サロン器楽・歌・舞踏－
女性作曲家エリザベト・クロード・ジャケ・ド・ラ・ゲールとともに』

場所：早稲田大学小野記念講堂

演奏：小林木綿氏 小林瑞葉氏 廣海史帆氏 武澤秀平氏
ローラン・テシュネ氏 市瀬陽子氏（バロックダンス）

バロックヴァイオリンやチェンバロなどの美しい古楽器によって演奏される、ド・ラ・ゲールの音楽を聴き、楽器やバロックダンスのワークショップをも併せて実施することにより、女性音楽家としての彼女の活動の世界に触れることができた。



■ 「オペラ／音楽劇の総合的研究」プロジェクト （通称：オペラ研究会）

オペラ研究会では、理論面と実践との両面からオペラ研究を行う試みとして、以下のレクチャーコンサートを行った。

日時：2008年7月29日（火）16:00～19:00

演題：『聖徳大学が挑む2種類の《魔笛》公演 ―「場」と「言語」の観点からオペラ上演を考える―』

場所：大隈記念タワー（26号館）地下多目的教室

講師：山本まり子氏（聖徳大学准教授）

十川稔氏（オペラ演出家・聖徳大学講師）

藪西正道氏（歌手・聖徳大学准教授）

島崎智子氏（歌手・聖徳大学准教授）

鳥居俊之氏（作曲家・聖徳大学准教授）他、
制作スタッフの方々

聖徳大学音楽学部の2種類の《魔笛》公演に際し、その制作過程から浮かび上がる諸問題を、制作に携わる方々にレクチャーしていただいた。サントリーホールでの公演は、ホールオペラ形式／ドイツ語上演＋日本語字幕によるもの、また、聖徳大学講堂での公演は、通常のオペラ形式／日本語の台詞＋ドイツ語



(前ページより続き)

の歌によるものである。この二公演の制作の実際について、オペラを上演する際の「場」と「言語」の両方に着目し、DVD 上映

や実演も交えて豊富な経験を語っていただいた。

(客員研究助手 鈴木辰一・村瀬民子)

■ シェイクスピア・ゼミ

シェイクスピア・ゼミでは、ほぼ月1回開かれる研究会・講演会などの活動を通して、テキスト論と上演論を結びつける方法論の確立を目指している。7月終わりには研究員の研究報告会を開き、白熱した意見交換と情報交換が行われた。また、8月初めには、9月の講演会に向けて、フランソワ・ラロック教授(François Laroque)の *Shakespeare's Festive World* を取り上げた読書会を開催した。9月にはパリ第3大学のフランソワ・ラロック氏を講師に招き、2度の講演会を行った。

フランソワ・ラロック氏講演会(第4回、第5回シェイクスピアゼミ講演会)

第4回 2008年9月20日(土) 15:30~17:00

“Shakespearian Anthropology: Magic, Misrule and Merry England”

フランソワ・ラロック氏の著書 *Shakespeare's Festive World* は今年、『シェイクスピアの祝祭の時空』として邦訳が出版された。その著書への評訳として位置づけられたこの講演では、民間祝祭の伝統と近世の曆に焦点を当てながらシェイクスピアの戯曲が考察された。

第5回 2008年9月25日(木) 15:30~17:00

“Signs, Signature in Early Modern Europe”

ラロック氏の2回目の講演は、16世紀の西洋絵画に描かれている署名が自我の確立を表現していたことを、ホルバインなどの作品の検証から示した。そして、『ハムレット』、『十二夜』、『アントニーとクレオパトラ』、そしてソネットなどでも言及される、名前を記すという行為がどのような意味を持つのか、示唆された。

(事業推進担当者 本山哲人)

新 刊 紹 介

『土方巽 絶後の身体』(稲田奈緒美著、NHK出版、2008年3月発行)

明治以降の舞踊と身体の西洋近代化に対するアンチテーゼとして生まれた、暗黒舞踏の創始者、土方巽の初の評伝。土方と共に時代を作った美術家、文学者、舞踊家、友人ら約70名にインタビューを試み、資料を発掘することを通して、土方が戦前の秋田で生まれ育った社会、教育状況から、戦後上京し、前衛美術、音楽、写真、文学などと共犯関係を結びながら疾走した1960年代、さらに1970年の時代の転換期を経て1986年に没するまでを一年ごとに辿った。その結果、暗黒舞踏を「土俗的」「日本・東北回帰」などとみなす従来のステレオタイプな本質主義的解釈とは異なる、新たな視点で多面的に描出している。舞踊研究のみならず、日本の近代の身体史、60年代前衛美術、演劇、文学論など様々な研究の一助となれば幸いである。

(グローバルCOE研究員 稲田奈緒美)



編集後記

ようやく秋めいてまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。ニュースレター第3号をお届けします。今号では、国際研究集会・60年代演劇再考を初めとするさまざまな行事の報告を掲載することができました。今回掲載した行事や研究会の数は、20以上にのぼります。その報告だけで紙幅が尽きてしまい、今後開催される行事をお知らせするイベントカレンダーを掲載する余地がなくなってしまうました。11月の主な行事だけでも、集中講座『中国演劇研究者のための中国語講座』(初旬)、演劇論講座『南米コロンビアの社会と演劇』(5日)、舞踊研究コース研究会『ダンスを生きる—舞踏、オイリュトミー、コンテンポラリーダンスを巡って』(7日)、演劇論講座『演劇博物館の社会的役割について』(17日)、演劇論講座『観客参加型演劇—インプロの魅力』(25日) などなど、演劇・映像について学ぶチャンスが目白押しです。ぜひメールニュースやHPなどをご確認ください。皆様のお越しをお待ちしています。

(客員研究助手 村瀬民子)

News Letter 第3号

2008年11月15日

編集: 村瀬民子 鈴木辰一 埋忠美沙 崔柄珠 森平崇文 後藤大輔 長嶋由紀子

発行者: 早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>